

## 2012 年度 FD 活動評価点検報告書

### 1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

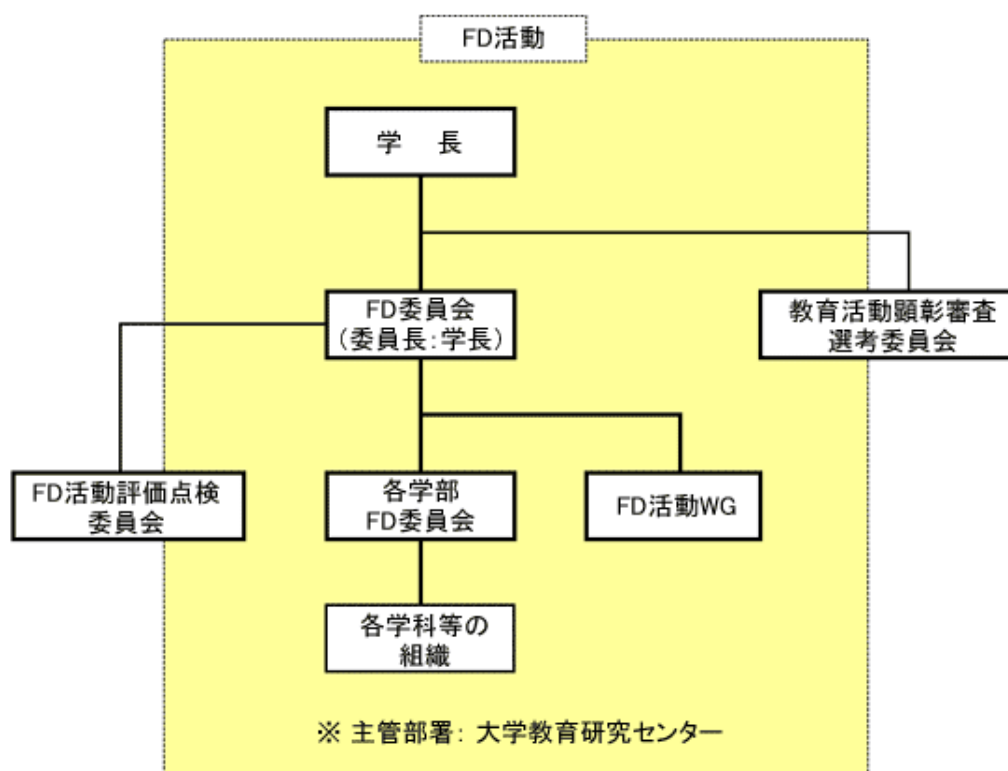


図 1 中部大学の FD 活動組織図

**FD 委員会** : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

**FD 活動 WG** : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

**FD 活動評価点検委員会** : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

**教育活動顕彰審査選考委員会** : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

## 2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けにホームページ上で公開されている。

2012 年度から、FD 評価点検の様式が、表 1 の形式別に見た FD 活動の会議・打ち合わせを別に記載するように様式を変更している。同時に、年度初めに学部等における FD 活動推進計画書を提出、さらに年度終了時の FD 活動報告書については提出方法の変更を行った。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議・打ち合わせ
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部対象	2) 懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教室対象	3) 講演・報告会・セミナー
カリキュラム改善	(*1) 非常勤を含む	4) ワークショップ
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(\*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(\*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

## 3. 2012 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』への取り組みを実施しており、この目標を達成するために継続事業を含めて新たな事業に取り組んだ最終年度に当たる。当初、本重点目標は 5 年間を目安としていたが、2012 年 11 月に開催した FD 委員会において、引き続き 2013 年度以降も重点目標とすることと同時に、その意図するところを明確に学内に広く提示することが望ましいとして、以下の枠内のおり決定し、公示した。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

- 魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業  
（教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
- 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得  
（教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ  
（学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

また、別途、『魅力ある授業づくり』を重点目標にしてきた5年間のFD活動に関する評価報告書を2013年度に作成している。

例年、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発なFD活動を進めてきており、学生の生の声を聞き、学生とともにより良い授業にしていく努力を全学として続けている。こうした中、教育現場である各学部では、以下のようなFD活動の目標設定を行い、FD活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科 :

- ①「中部大学教育活動顕彰制度 受賞者による講演会」を開催し、受賞者より『魅力ある授業づくり』について講演頂き、各教員の授業力アップの一助とする。
- ②『魅力ある授業づくり』に関するタイムリーな企画があれば、工学部FD委員会で審議し、随時開催する。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科 :

- ①「魅力ある授業づくり」の基礎をなす「学生による授業評価」への参加率を向上させる。回答率が10%未満の科目数を3割低減する。(2011年度100クラスを70クラスへ低減)
- ②少人数教育経験交流会を実施する。
- ③授業改善報告会兼教育活動改善受賞報告会を実施する。(教育活動改善優秀賞を受賞した教員が無い場合には実施しない)

(3) 国際関係学部 :

- ①講義科目においても英語を使用する機会を増やす。これにより「講義を通じて、専門知識の修得のみならず、英語能力も向上できる」授業の実施を目指す。学部の語学教育の質・内容の一層の充実。
- ②海外での実地調査を実施した教員の経験とノウハウを、他の教員にもフィードバックして情報を共有し、それを生かした授業への取り組みについて学科内で検討を進める。
- ③外国語科目を中心に非常勤講師との意見交換の場を頻繁に持ち、必要に応じて学科教員全員にフィードバックし、学科教員の学生指導に役立てる。
- ④学生に関する情報を常に共有し、様々な学生指導の場に役立てる。

(4) 人文学部 :

- ①高校（特に併設校）と大学との連携を強化し、入学前指導等を通してスムーズに大学教育への移行を図る。
- ②地域との連携を強化する。
- ③Web等を使った双方向型の授業について検討する。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科 :

- ①各学科、専攻科、研究科でのFDに関する意見交換会を定期的で開催する。
- ②各学期の終了後にFDの全体会議を開催し、次学期における学部としてのFD活動の方針を決定する。
- ③研究科においては、講義課目の中でも特に研究法特論の内容について魅力ある講義を行うための議論を重ねる。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科 :

- ①学生からの授業評価について各教員に学生に積極的に対応するように呼びかけることを徹底する。
- ②看護学セミナー、臨床検査教育セミナー、理学療法教育セミナー、作業療法教育セミナー、臨床工学教育セミナー、健康スポーツ教育セミナー等を企画し、学部・学科教育に外からの刺激を与える。
- ③春学期と秋学期の終わりに授業反省会を行い、授業の課題や問題点を全教員で共有する。
- ④春学期と秋学期にクラス委員と教員の懇談会を行い、学生からの意見を聞く。学部としての教育顕彰制度に積極的に参加する。

(7) 現代教育学部・教育学研究科 :

- ①新任教員の研修の機会に力を入れ、その第一歩として新任教員を対象とした会議を開く。
- ②必要に応じて、新任の教員が学部の先生方の授業見学ができ、授業・教授法の改善ができるように配慮し、『魅力ある授業づくり』を進めるための資料収集と情報の共有、課題の検討などを実施する。

(8) 全学共通教育部 :

- ①全学共通教育を中心とした新教育改革の理念の下、全学共通教育部のFD活動の継続的推進を図る。
- ②教育科を越えたFD活動はどのようにあるべきかについて議論し、各教育科が担当する科目において、全学共通教育に関わる教員への教育内容・教育理念に関して共通理解の形成(懇談会・研修会の実施、教材提供等)を図る。
- ③授業改善に向けての取り組み(授業・教授方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価等)のための具体的方法についても検討する。

(9) 国際人間学研究科 :

外部との接触による研究・教育能力の向上と、内部における相互接触による啓発・啓蒙の2つが考えられ、二方向からFD活動を推進し、研究科全体のレベルアップを図るよう努める。

5年目となった『魅力ある授業づくり』は、授業評価回答率のアップや授業力向上などの具体的目標設定がなされるようになってきており、目標設定の点からも重点目標の『魅力ある授業づくり』の浸透と学部での共通理解が行われるようになったことを伺うことができる。

## 4. 2012年度のFD活動の取り組み

### 4. 1 全学の取り組み

2012年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターホームページに詳細が記されている(URL: <http://www.chubu.ac.jp/fd/>)。主な取り組みは、①教員による教育活動重点目標の設定、②授業改善の取り組み、③FDフォーラム・講演会、④FDに関する研修会・説明会等、⑤FDカフェ、⑥出版物、⑦教育活動顕彰制度の実施に分けられ、主な点についての現状と評価を記述する。

## ① 教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2012 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 466 人中 457 人、自己評価提出者は目標設定者 457 人中 443 人であった。

その形式・内容は、2005 年度以前は全学統一であったものを学部、学科増により各学部の特色を生かすべく学部ごとに定めるように変更したが、2013 年度以降、『魅力ある授業づくり』に関する共通項目を含めることを FD 委員会で決定した。

## ② 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 6 つを取り組んできた。

### 1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「Web 入力方式」だけであった「学生による授業評価」に「携帯電話入力方式」を導入して 3 年目となる。2012 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 31%、秋学期約 23%、教員の自己評価回答率は、春学期約 63%、秋学期約 60%であった。

毎年、秋学期学生回答率は、春学期に比べて減少するという傾向があり、開講科目の違いや学年末という時期など原因については今後分析が必要であるが、Web 入力方式とした春・秋学期の回答率ではそれぞれ毎年更新し、最も高い結果であった。自由記述においても、春学期 3,789 件、秋学期 2,215 件と同様にそれぞれの学期で最も多い結果となった。

授業評価の個々の回答率のアップが常に意識される場所であるが、教員と学生の意識に任せている本学の授業評価の結果から、教員と学生の両者の「授業評価」を通したコミュニケーションへの参加が高まりつつあるものと評価され、さらなる継続と増加が期待される。

### 2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話による「授業改善アンケート」を採用した、授業中に教員がネット環境を使って学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステム「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」の運用も 3 年目となる。スマートフォンでの操作がしにくいなどの学生からの意見を受けて、スマートフォンにも対応できるようにシステム改善を行い、2012 年度から運用を行った結果、利用実績は 256 件（春学期 52 件、秋学期 204 件）と 2011 年度に比べて通年で 1.5 倍となり、今後、更なる活用の増加が期待される。

### 3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の 2012 年度実績は 18 件で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影を 15 件含んでいる。

### 4) 授業のオープン化制度

既に学科内で授業見学などが毎年行われている学科もあり、授業オープン化が学内で浸透してきている。しかし、そうした企画がない場合でも対応でき、他の教員が授業を参観できるシステムとして 2009 年度から本制度が整備されている。後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

#### 5) 全学公開授業

「全学公開授業」を2件実施し、15人の教職員の参加があった。

#### 6) 授業サロン

「授業サロン」では、学部間を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行っている。「授業サロン」は、春学期1グループ、秋学期2グループ実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。各グループの人数は少ないが、すでに10グループにおいて実施されており、着実に強いFDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの大きな原動力になることが期待できる。

#### ③ FD フォーラム・講演会

大学生の心の問題をテーマにした講演会と2012年8月に出示された中央教育審議会答申が求める教育の質保証に関する3回の講演会が行われた。前者は、現場でメンタルケアに当たっておられる精神科医を招いて、「現代の学生と心の問題」についての講演会が開催された(参加者103人)。後者は、中教審答申の中で取り上げられた「教育の質保証が求めるもの」について、中央教育審議会大学分科会大学教育部会長からその内容についての講演(参加者112人)を切り口として、中教審答申の具現化に向けて「主体的な学修の促し方」についての講演会(参加者52人)、教育の質保証の手段として「ルーブリック評価の考え方」についての講演会(参加者57人)が開催された。教育の質保証についてのテーマを意識した三段階の講演会形式が実施されたことで、各教職員の意識の向上と方法の情報提供を担うこととなり、今後、各教員の活動に何らかのよい影響が期待される。

#### ④ FDに関連する研修会・説明会等

毎年、新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長から、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等が説明されている。

また、全教員に「話し方・板書の仕方」など授業スキルのワークショップであるキャリアアッププログラムを案内しており、元アナウンサーを客員教授として迎えて講師をお願いして「話し方」に関するプログラムを3回開催するとともに、先述の「授業サロン」にもおいても授業中の話し方についてアドバイスを受けるといった授業スキルについての実践的研修が進められた。さらに、学生への対応という意味で客員教授を講師に「相互理解を深めるアサーション(自己表現)」に関するプログラムを2回開催、「ルーブリック評価」に関するプログラムを1回開催、学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステムである「Cumocの使用法」に関するプログラムを1回開催した。いずれも、本学のFDキャリアアッププログラムメニューとして形を作るまでに成長しており、繰り返し開催することで非常勤を含め、多くの教員が体験できるプログラムとなっている。

非常勤講師については、全学レベル、学部・学科レベルの懇談会・分科会を実施しているが、実践的研修であるキャリアアッププログラムに非常勤講師の参加も多いのも特徴といえる。こうした実践的研修に、特に教歴の浅い教員にこうしたプログラムに積極的に参加できる環境が必要とのことから、「『魅力ある授業づくり』プログラム」を2012年度に検討を行い、2013年度から実施することがFD委員会で決定している。

#### ⑤ FD カフェ

「FD カフェ」は、2012 年度に設置された FD 活動 WG 分科会により提言された教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として、2013 年 3 月に第 1 回を開催した。同プログラムは、教職員が気軽に情報交換や意見交換を行うことで互いの教育力向上を目指しており、この企画への参加者による全学にまたがるネットワークづくりも狙いとしている。「FD カフェ」は、原則として各回のテーマを定め、話題提供者の概説、ファシリテーターの進行による意見交換というグループ研修の形態として運営している。今後の話題提供については教員からではなく、全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPPF) が提供しているオンデマンド講義の活用なども予定している。

#### ⑥ 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』および『中部大学教育研究』を発刊している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用されている。さらに、大学の情報公表の資料作成の一部にも利用されている。また、2012 年度においては、教員の多様化に伴い、教員の研究業績等の分類などが実態とそぐわない面があったため、記入の仕方を一部変更した。後者は、1979 年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に 2001 年から発刊されており、教員の情報共有の場ともなっており、また研究論稿は教育研究の分野でも引用されている実績を有している。

#### ⑦ 教育活動顕彰制度

2008 年度より学部での評価の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2011 年度の「教育活動優秀賞」は 10 人が受賞したが、「教育活動特別賞」については本制度施行後 4 年目で初めて該当者なしとの結果となった。実施要項、審査総評等はホームページで公開されている。

### 4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動報告が提出されており、ここには提出された報告書から 2012 年度の学部・研究科・学科での FD 活動をまとめた。

#### (1) 工学部・工学研究科

- ・ 中部大学教育活動顕彰者 (工学部教員) による講演を含めた工学部 FD 講演会の開催

#### (2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- ・ 「学生による授業評価」への参加率向上について目標数値を設けての取り組み
- ・ 少人数教育経験交流会を実施

- (3) 国際関係学部
  - ・学部の語学教育の質・内容の一層の充実をめざした「中部大学夢構想シンポジウム」の開催
  - ・教育内容を深めるための外部講師を招いた学科セミナーの開催
- (4) 人文学部
  - ・他学部および学部内から講師を招いた FD 講演会により、さまざまな授業方法や、授業形態について考えるきっかけを提供
- (5) 応用生物学部・応用生物学研究科
  - ・「授業評価」の精度を上げ、相互のコミュニケーションを密にすることを目指し、全学平均以上の回答率を記録
- (6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科
  - ・授業反省会の実施
  - ・臨地実習指導に関する講演会・報告会ワークショップの開催
  - ・大学院教育の在り方についての講演会
  - ・研修会・セミナーの実施
- (7) 現代教育学部・教育学研究科
  - ・外部（全国私立大学教職課程研究連絡協議会）への教員派遣と報告会の開催
  - ・セミナー開催による学科教育の課題収集
  - ・若手教員研修
- (8) 全学共通教育部
  - ・全学共通教育科目の実施状況に関するアンケートの実施
  - ・共通項目に関する研修・セミナーを企画・実施
  - ・他大学の教職課程の取り組みに関する情報を入手し教員間で課題の共有
  - ・教員資質の理解と向上のための研究交流
- (9) 国際人間学研究科
  - ・教員・学生が自らの思考力・構想力を高める講演会およびシンポジウムの開催

これに対して、各学部からの FD 活動に関する課題については、以下が挙げられた。

- 1) 講演会・セミナーへの参加者数の低迷
- 2) 「学生による授業評価」への参加率向上に対する実践ある取り組みが発展途上
- 3) メンタルな問題を抱える学生の「居場所」の確保や保護者との対応と学部での情報共有の不足
- 4) 学生の入学から就職までの人材育成への取り組み
- 5) 学部における教育活動顕彰制度の客観的な方法の見直し
- 6) 若手以外にも学部全教員が参加できるような研修システム
- 7) セミナー・研修・発表会などの増加と科目の重要性の発信
- 8) 老朽化器具、大人数講義の円滑な運営上の必要かつ適切な教室の確保
- 9) 研究科独自の FD 活動の模索

本学では、既に FD 講演会の話をお聴きだけでなく、いくつかの学部でも実施されているよう



に研修、セミナーが増えてきている。しかし、参加者の固定化、参加者数の伸び悩みが、どこの学部にも同様にある。今後、こうした参加者への対応は、若手教員および新任研修においてFD研修の必要性を自覚することが重要と考えられ、今後の具体策が期待される場所である。また、「学生による授業評価」への参加率アップを目指し授業評価の精度を上げる学部もいくつか出てきているが、実践的な対応には至っていない。この点も今後、新たな取り組みが現れるかもしれないが、授業評価は学生の少数意見にも傾聴するコミュニケーションの場であることも実践において忘れてはならないであろう。

#### 4.3 2012年度のFD活動の取組みの傾向

2012年度の本学のFD活動の目的別、対象別（参加対象別）、内容形式別にまとめたのが次の4つのグラフである。2012年度から、FD活動に関する会議は、別資料として数のみ集計している。図2.1～2.4から、本学のFD活動は、目的、対象、内容についてほぼバランスよく実施されていることが伺える。特徴としては全学対象、学部対象としたFD活動の割合が2011年度より増加している傾向があり、FD活動組織の活動がより活発になったものと考えられる。依然として学生参加のFD活動の取り組みがやや少ない傾向にある。

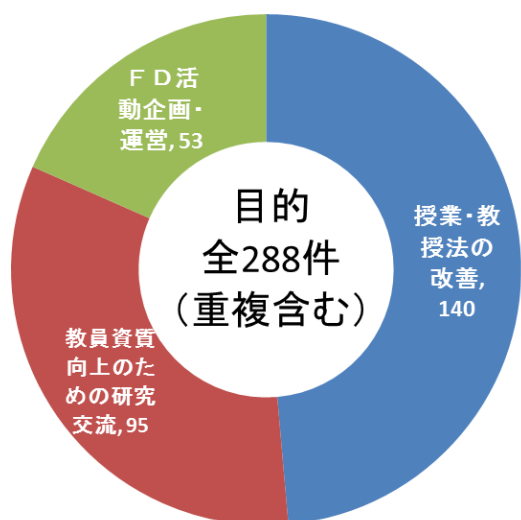


図 2.1 目的別にみたFD活動

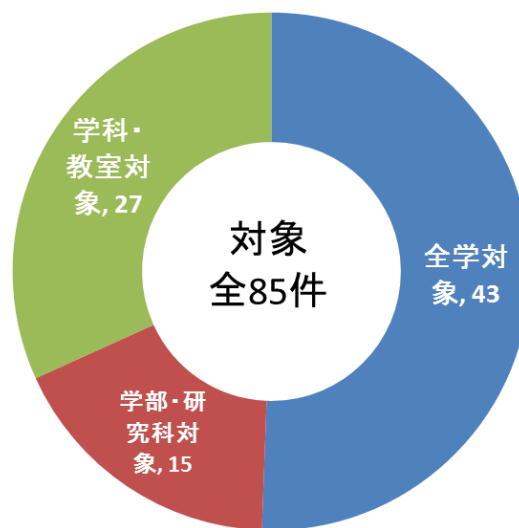


図 2.2 対象別にみたFD活動

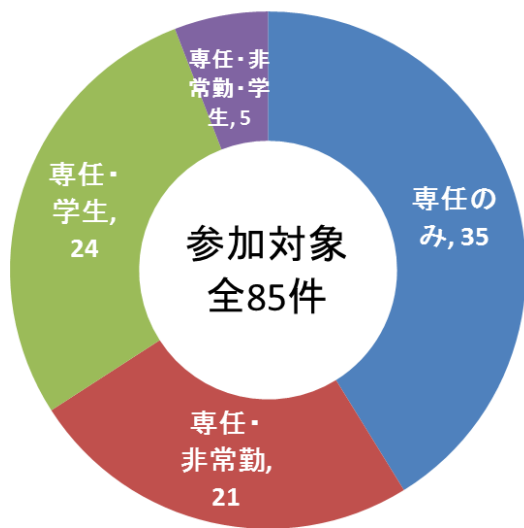


図 2.3 FD 活動の参加対象

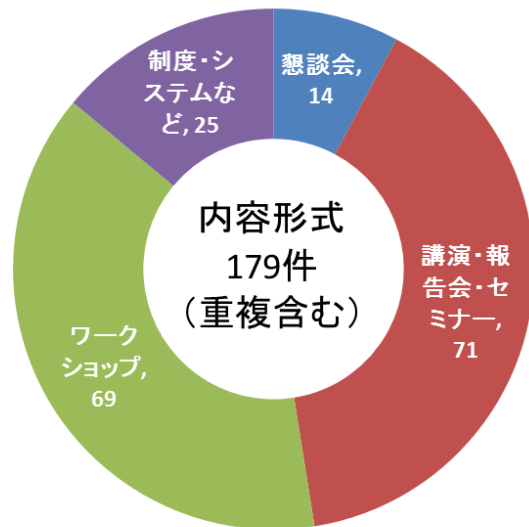


図 2.4 形式別にみた FD 活動

(※合計件数は、重複項目があるため一致しない)

## 5. FD 活動に関する課題と今後の計画

FD 活動に関する各学部の取り組みにおける課題にもあったように、FD 活動への参加者の固定化および参加数の伸び悩みなどの問題がある。2012 年度の FD 委員会で「『魅力ある授業づくり』プログラム」の施行が承認され、全学における FD 講演会、教員キャリアアッププログラム、授業サロン、FD カフェなど、FD 企画のプログラムへの参加による新任教員対象の研修プログラムで、ポイント制による修了証を授与することにした。本プログラムは、新任教員だけでなく、在籍教員も参加することができ、FD 活動参加への勧奨システムである。こうした取り組みや、学部でこうしたプログラムへの参加を勧奨することも本課題の解決の糸口として進めていく。

また、学生参加型の FD 活動については、資料としては挙がってこなかったが、現在、行われているピアサポート制度、フレッシュマンキャンプリーダー、ボランティア・NPO センター、C.U.P.、学生寮リーダー等、他大学では学生参加型の FD 活動として捉えている場合もあり、本学も既の実施している。今後、学生参加型 FD というものについて共通認識を得ることも必要であり、さらにどの学生も参加できる学生参加型 FD 活動についても 2012 年度 FD 委員会で承認されており、2013 年度に実施する予定である。

授業評価の回答率の改善(学生による授業評価回答率、教員による授業自己評価回答率、教員によるコメント率)については、春学期、秋学期に分けてまとめたところ、Web 回答を取り入れてから 2012 年度がどちらも最高の回答率を得ることに至っており、教員および学生に浸透しつつある。今後も、さらなる各学部学科の教員が意識を高めて努力していく必要がある。